

東京文化短期大学臨床検査学科

伊藤 昭三*

はじめに

本学科校舎は、中野駅から徒歩6分の閑静な住宅街にあります。パープルブルーの色調の校舎はオーストリアのウィーンの建築を参考にして建てられました。中庭が地下となっており、地下一階でも明るく、狭いながらも広さを感じさせる校舎です。その可愛らしく品のある本学科の特色を皆様にご紹介いたします。

I. 先駆け力

本学科は、1952年(昭和27年)東京文化短期大学内に医学技術研究室として誕生しました。日本臨床検査医学会の前身であります臨床病理懇談会(国立東京第一病院長 坂口厚蔵、聖路加国際病院長 橋本寛敏、東京医科大学教授 加藤勝治、東京大学教授 緒方富雄の4先生が発起人)において、「正規の専門教育を受けた臨床検査技術員は一人もなく、すべて旧軍隊などで一部教育を受けた人々のみであるため、今後はどうしても臨床検査全般にわたる基礎ならびに実習教育を受けた技術員が必要である」ということが論議されました。その世話役でありました聖路加国際病院院長で米国病院事情に精通されておられた橋本寛敏先生が東京文化学園の理事長をされていた関係もあり、本学内に設立すべしと当時の森本静子学長へ進言され、ここに本邦における臨床検査技師教育が始まったのです。その後時勢に伴い「医学技術学校」、「医学技術専門学校」と学校形態を変えつつ

教育を続け、2006年より再び東京文化短期大学内に臨床検査学科を開設し現在に至ります。

II. 情熱力

本学園の教育理念は3H精神(Head, Hands, Heart: 活(はたら)く頭、勤(こ)む双手、寛(あ)き心)という精神力と実践力を掲げています。単に知識や技術が優秀である臨床検査技師を輩出するのではなく、学生の日常生活にもきめ細やかに配慮し、礼節はもとより規律の遵守、自己の健康管理も重視し育成にあたっています。本短期大学は前身が専門学校であったことで、医療人、職業人としての育成方法の充実と経験は豊富にあります。全教職員が全学生192名と常に近い存在で対応し、生活指導、進路相談、勉強相談に当たっています。学生の無断欠課、レポートの提出の未提出をチェックし、必ず休む場合は各自教務課へ連絡を入れさせています。また各講義室、実習室は利用後に学生に掃除をさせ教員が点検を行うなど徹底しています。また飲食場所はカフェテラスのみと日頃からの衛生観念を身に付けさせています。新渡戸祭(学園祭)では学生に混じって教員も仮装カラオケと呼ばれるステージイベントに参加し、常に学生と一緒に教職員が経験し学生との一体感の形成に努めています(図1)。さらに専任教員はほとんど臨床検査の現場出身ですので、学生にとって病院実務に関係した学問的相談、進路相談にはこれほど強い味方はありません。

* m_sitou@tokyobunka.ac.jp



図1 新渡戸祭(学園祭)



図2 実習風景

III. 専門実習力

学内実習は、基礎的な反応原理の理解を目的とするものから現場で即実践できる技術まで幅広く網羅しています。通常週1回の実習で、毎週レポートを提出させています。例えば生化学検査学実習のレポートなどは不備や結果違い、考察が不十分な場合、再レポート、再々レポートを提出させています。また内容について一例を挙げますと、輸血移植検査学実習では、正常検体の判定を目的とした基本的な輸血検査だけでなく、唾液検査や吸着解離試験を交えた ABO 血液型亜型検査、直接抗グロブリン試験陽性検体の抗体解離試験を用いた精査、パネル血球を用い消去法による不規則

抗体同定、ABO 血液型不適合妊娠による新生児溶血性疾患の診断から輸血までの検査、カラム凝集法による血液型検査と抗グロブリン試験などを行っています。他にも PCR 実習なども行っています(図2)。

IV. チーム力とフォロー力

学生全員が臨床検査技師を目指しているということで日常でも学生同士の結束は堅く、「国家試験全員合格」という暗黙の合い言葉が学生と全教員の意識の中に浸透しています。そしてそれをフォローする制度がチュータ制です。成績が振るわない学生に対して専任教員が個別に勉強方法を中心に指導、補習等にあたっています。

V. 教員力

大学において講義と研究は使命であり、短期大学と云えどもどちらかが欠けても良い教育は出来ません。専任教員には現場経験を積まれた臨床検査技師を招いています。各教員は研究日に各大学で共同研究に携わったり、大学院に籍をおいて研究するなど自己研鑽に余念がありません。さらに全員臨地実習先担当を決め、臨地実習期間内で何回か学生の実習状況の視察を行い、そのことが各教員の現場感覚を忘れない一つの方法になっています。また担当実習に関して夏休みを利用し病院での研修等も行っています(図3)。



図3 教職員集合

VI. 臨床現場力

第1学年の終わりに関東圏内の病院検査室を見学させて頂いています。第2学年には卒業生にホットな仕事の話や学会発表した研究を講演して頂き、現場の雰囲気と自分の将来設計を考える機会にしています。臨地実習は第3学年の4月から6ヶ月間と長期間にわたって実施しています。臨床現場での体験は臨床検査技師としての知識や技術の向上のみならず、職務における責任の重大さや社会に対する高い貢献度を実感することで目的意識や向学心を高めることに繋がり、また実際に疾患に苦しむ方々を目の当たりにすることは、精神面、情緒面で人間性を大きく成長させています。

VII. 飛躍力

海外研修としてオーストラリアの医療施設見学、大学での受講、医学生や日本人臨床検査技師との交流を行っています。本学は新渡戸稲造が初代校長であるという経緯から国際社会に役立つ人間を輩出したいと考えています。今年度(2008年)から河合 忠先生(国際医療技術交流財団理事長)、

長村義之先生(日本病理学会理事長、東海大学医学部教授)を客員教授として招聘し、国際的で、高度専門職業人育成にふさわしい短期大学を目指しています。

VIII. さいごに

世の中が常に変化しているように東京文化短期大学も常に進化し母体である東京文化学園が今年(2008年)から新たに新渡戸文化学園と名称を変更致しました。更に2010年には短期大学名も新渡戸文化短期大学に生まれ変わる予定です。どんなに世の中が変わっても本学の財産は学習意欲に燃えた学生、それを支えている情熱のある教職員、わが校に愛情を持って教授して下さる非常勤講師の先生方、ここから飛びだった卒業生です。これからもわが国における臨床検査技師教育の先駆けとしての誇りと本学科の教育に多大なご尽力を頂いた教職員の皆様、多くの卒業生の活躍に支えられていることへの感謝の気持ちを忘れず、真の医療人の育成に教職員一丸となって邁進していきたいと思っています。